



## 天体観望ガイドブック 新版 宇宙をみせて

天文教育普及研究会 編  
水野孝雄・縣秀彦 監修  
恒星社厚生閣 定価3,000円+税 204頁

解説書  
お薦め度  
5  
☆☆☆☆☆

研究者による講演会が増え、天文学で何をやっているか、よく知られるようになってきたと感じる。その一方で天文学と言うと、望遠鏡で星をのぞいているイメージがまだまだ根強いのも事実だ。それだけ望遠鏡をのぞくことに対して、強い印象があるということなのだろう。実際自分自身で望遠鏡をのぞいたときの感動は大きく、「自分の目で天体を見たときの感動は、最先端の望遠鏡で撮られた美しい画像にも勝る」という話をよく聞く。

しかし「望遠鏡をもってない」「都会で空が明るい」などの理由や経験不足から、自分たちが主体となって観望会を行うのは不安だと思う方も多いのではないだろうか。

この本は、そんなときに役立つガイドブックなのだ。観望会を都会で行う場合、学校で学習を兼ねて行う場合、夕方に行う場合など、さまざまな場合の実践例が含まれている。肉眼や望遠鏡で直接天体を観ることだけが観望ではない。インターネット望遠鏡やBSアンテナを使った楽しみ方や、さらには車椅子やベッドからのぞけるユニバーサルデザイン望遠鏡の紹介など、思いつくありとあらゆる場合が紹介されている。幼稚園児のわが子とその友達で内輪で行った例もあり、うれしく思った。親の好きなことを子どもに伝え、楽しいひとときを共有する、それが教育普及の原点だなあ、と改めて感じた。

この本の全体を通して一番感動したことは、とにかく心配りが細やかということだ。準備から観望会を終える後までの手順やヒントが満載である。各著者が自分の経験に基づいた助言を書いており、「なるほど!」と共感する点が多い。このような、ちょっとしたノウハウを知っているか否かで、主催者側も参加者側も印象が大きく変わるのはいままでもない。このようなノウハウは同じ機関やグルー

プの中で、口頭や内輪のマニュアルで伝承されることが多いだろうが、この本を読むことにより、誰でも有用な情報を得ることができるのだ。例えば「昼間の金星の観望会で、肉眼で見つけた参加者が一人でも出ると、その人が感動して、周りにどんどん教えてくれる。肉眼での金星探しが進んでいる間に、望遠鏡で順番に金星を見てもらう」など、実際に経験しているからこそ書ける内容が多い。

ページの構成にも工夫が見られる。具体的な観望会の進め方が見開きで掲載され、各項の右ページに大まかな所要時間や時間帯、可能な参加者人数などがインデックスで表示されている。自分が計画している形態に沿った項目だけ見ることが可能だ。コラム欄などに記された小ネタやアドバイスも面白い。アニメに出てくる月と実際に見える月の比較や、ウルトラマンで有名なオリオン座のM78を見せた後でカシオペア座NGC457を入れるとバルタン星人に見えるというネタには大笑いした。このような、観望会で使える楽しいネタもあちこちに散りばめられている。

なかには観望会にとどまらず、出前授業や理科の自由研究で使えるようなネタも含まれている。夜道を歩くと月がついてくるような感覚は、多くの人が経験し、絵本にもなっているが、その現象の確認の方法など、天体観望から一步踏み込んだ検証や解説が楽しい。

自分がまだハワイにいたとき、地元の学校で出前授業を行ったクラスの先生に頼まれ、観望会を実施したことがあった。あのとき、このガイドブックがあれば、もっと気の効いた話ができただのにと思った。「観望会は難しい」と思っている方、この本を読んで、観望会への心理的ハードルを下げて実践してみられてはいかがだろうか。

白田-佐藤功美子 (国立天文台)